

ご挨拶

「福島デスク」は2014年5月7日に二本松教会から野田町 1-12-14 に移りました。「NPO 法人福島やさい畑」をなさりながら、デスクの仕事に尽力くださった柳沼さんに心から感謝しながら、それを佐久間、藤原、野上が引き継ぎ、皆様からのご教示を仰ぎながらデスクの役割を担って参ります。どうぞ宜しくお願い致します。

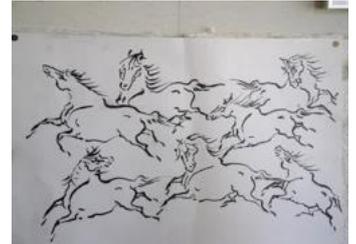
デスクとして福島の問題に関わり活動されている活動体のつなぎ、サポート。時の流れとともに風化させてはいけないこと、現状、必要をしっかりと国内外に伝えることに努めて参りたいと思っています。また、「福島ブロック会議」では、司教協議会から出された「東日本大震災発生から三年を迎えて」に沿って、新たな三年を小教区、団体としての活動において、それぞれの人の状況、必要性にどのように応えていったらいいか、方法、手段を話し合い、協力できる場にしていくことが出来ればと願っています。

福音は今、福島から育つようにおもわれます。イエスのおられるところに私たちもいることが出来るように目を開いて見、耳を澄まして声にならない叫び、眩きに耳を傾け、泣いている動植物、大地・自然の現状に感覚を研ぎすましていきたいと思ひます。宜しくお願いします。

二本松にある「安達運動公園仮設住宅団地」

の中に、浪江診療所があり、ホールボディーカウンティングの場所があり、デーサービスの施設がつくられていた。デーサービスでは、「相馬焼き」の窯元がこられ、焼き物の講習会が開かれていた。9人から10人の高齢者の方が参加されていた。馬の絵をさらさらと描いてくださっていたお年寄りには認知症が進み、デーにこられなくなったとのこと。かつて描いていたものが玄関先に貼られていた。また玄関先には見事な馬の絵の大きな壺に花が入れられていた。参加していた83才(?)のおばあさんは、「100才まで生きてやる!!! 放射能を見届けてやる

んだ」と拳をあげておられたのが印象的だった。でも、この方は炊き出しで食事をした後には、しみりと「食べるだけみんな食べて、行ってしまうのは失礼だよ。少ないよね。お客さん。申し訳ないね。せっかく遠くから来てもらって・・・」とコメントをされたことに心が痛んだ。



- 予約の人と思われるご夫婦がホールボディーカウンティングに車でこられた。浪江の役場の人達が対応されていた。土曜日だけれど役場の人は一日仕事とのこと。「きれいなところだから見ていってください!」と言われた言葉が哀しかった。



炊き出しに参加していた人のつぶやき:

- 「浪江で開墾し、家を建て、倉庫も建てた。こんなになって、人生わがねえなあ。じいさん、早く亡くなってよかった」

(大正11年生まれのおばあさん)

「なにもすることがなくて退屈だ」
「ここはいいよ。たくさんきてくれて」

◎この仮設には多くの支援団体が活動にくる。

仮設住宅団地自治会長さんたちの話し:

- デーサービス「ホープフル双葉」開所
(仮設住宅団地内)
- 幼稚園前の子どもから90代までの住民514人が住んでいる。
- 独居老人が多いのでどうしたらよいか / 男性22人、女性58人。家に居る人を無理

に引き出すことも・・隣りなど気をつけてはいるが、同じ地域だったらわかるが、違うところから来ているとわからない。浪江は49の行政地区があり、バラバラになって仮設に入っている。浪江は、帰宅困難（津島）、帰還準備、帰還地域と3つに分かれていて、その間にいろいろと問題がある。

- 被曝に対して考え方が変わった。前は防御服にマスクで家の整理に行ったが、今はなし。帰りたい人19%、決めていない人30数%、以前は帰ろうと思っていた人も避難が長引くにつれ帰らない方に傾いてきている。子どものいる家庭は帰ることに躊躇する。
- 浪江の家に帰ったら、豚が布団の中で寝ていた！（豚は潜り込む習性がある）
- 「お父さん、時間になったから家に帰ろう」（家の整理に行って、「家に帰ろう」と仮設が家となっている）
- ガソリンを入れるのに並んでいて3人ぐらい凍死した。
- 結果、逃げた津島地区が最も線量が高かった。みんな7~8カ所点々と避難場所をかわった。落ち着き場所が決まらない限り、何の支援物資もなかった。
- 浪江は280数カ所に分かれて避難した。避難先は高速観光が手配した。それで、役場もどこに誰が避難したのか分らなかった。ダイワハウスが誰がどこの仮設住宅に入るかを決めた。それで地域の人バラバラになってしまった。
- 浪江町は学校の受け入れが遅かったことから、この仮設から別々の小学校に通っている浪江町は500人ほどの子どもだったが、今は17人。災害の時には、学校単位でまとまって避難した方がいい
- 震災後すぐに現場にいてテトラに挟まれて助けてくれという人に出会った。人を呼んで助けにいく筈だったが、原発事故で入ることが禁止され、見殺しにした。生きている人も助けられなかった、どれだけ生きている人がいたか。未だに捜索していないところがある。東電には、恨み、怒りは他で受けてほしい、自分たちは遺体を安置して欲しい、ただそれだけが望みだった。
- また、再稼働とかいって、自分たちの教訓が

いかされていない。津島は2年間自由に出入り可能だったのが、3年目には出入り不可能、帰宅困難区域になった！

あの2年間は何だったのか！

事故6か月後に収束宣言をしたのはおかしい。

◎自治会長さんたちの体験されたお話、つばやきがこだましている。



子どもたちの声

子どもたちはじっと耐えているのではないだろうか。福島市内の教会で日曜学校の子どもたちに作文を書いてもらったところ、《子どもたちはこんなことを感じ、考えていたのか》と日頃、心のうちに秘めていたことを吐露してくれた。浪江町の「こころ通信」のインタビュー記事：「地震のときは、お母さんと妹の麻衣といっしょに、車で逃げたの。車には、チョコレート1個しかなくて、おなかがぺこぺこだったよ。その日の夜は車の中で寝たの。車の中にあっただカエルのぬいぐるみをずーっと大事にしているの。だって、ほかには何ももってなかったんだもの。」

もしできるなら、3月10日に戻っていろいろなものを見てみたいなあ。海、カエル、オタマジャクシ、ザリガニ…一番あいたいの、猫のタロー。どうしているか、とっても心配。

浪江にいた時には、お友達とマリンパークに行ったり、バーベキューをしたり、たくさん楽しいことがあったよ。今、通っている小学校は5クラスあって、お友達の名前を覚えるのが大変。浪江の小学校は1クラスだけだったから、みんな仲良しだったよ。浪江にいた時に、パパの誕生日に田植えをして、私の誕生日に稲刈りをするんだよって、おじいちゃんが教えてくれたの。あと8回寝たら私の誕生日が来るのが、今一番の楽しみ。いもうとの麻衣は、電車やバ

スが好きなので、東京でも楽しそうだけど、東京にはカエルがいないねと話しているの。」(インタビュー 泉田七海ちゃん・小2 『浪江のこころ通信』 P.54 より)

**「原発はばく発したけど、
ぼくのこころはばく発しないぞ！」**

震災後は、小高工業高校、相馬市、宮城県角田市、埼玉県、あだたら体育館、土湯温泉と移って、ちょっと前に福島市上鳥渡しのぼ台の仮設住宅に引っ越してきました。すぐ南前の仮設住宅に、おしいちゃんおばあちゃんが住んでいて、犬のイチも、みんないっしょです。

学校は、荒川小学校に通っています。幾世橋小学校のときの近くの子も何人かいるのが、うれしいです。友達もできました。9月18日が運動会です。楽しみです。

浪江町であった、初発神社の盆踊りのことやふれあいまつりでのもちつき、雑煮もちの事、みんなでザリガニ取りをしたこと、3年生の時にビーズのストラップを作ったことなどを思い出します。

幾世橋小学校での大の仲良しだった原田勇真くんが、避難先の桑折町立釀芳小学校にいた時に、僕が会ったこともない勇真君のクラスの子全員から、手書きの励ましの手紙をもらいました。僕の宝物です。」(郡崇斗・小4浪江の『こころ通信』 P.49 より)

福島の浜通りに原発が建設されたのは、なぜなのでしょう。『J-one8』の記事の中に考えを促す記事があった。

**★「福島第一原発事故終息を担う原発作業員が
準えられることの多い特攻隊員。その飛行場跡
が南相馬市原町区にあった。」**

福島第一原発事故直後、フクシマ・フィフティーズと呼ばれた決死の作業員を送りだした地元協力会社の社長はじめ、南相馬に残った若者が原発事故終息の願いを込めて『俺、作業員になろうかな』と口にした時、母親から『太平洋戦争で特攻隊を送りだす時はこういう気持ちだったのか』と言う言葉を何度か聞いた。

そもそも事故を起こした福島第一原発の敷地は旧陸軍・磐城飛行場で、昭和20(1945)年2月に特攻隊の養成基地となり、原発跡にある展望台に記念碑があるという。現在、それは確認に行けないが、特攻隊基地としては南相馬市原町区(旧原町市)にも原町飛

行場がかつてあり、場内にあった「航空神社」や遺構、特攻隊員の祈念像を見ることができる。…

この地が飛行場に適していると陳情書が出されたのは、昭和6年。原発交付金の無かった当時、地方の自治体が軍を呼び込んだのは発展への期待からだろう。」(『J-one8』 p.21 より)

県内死者（行方不明者）（単位人）				
	直接死	関連死	死亡届等	合計
福島市	6	9		15
伊達市		1		1
国見町	1			1
川俣町		19		19
大玉村		1		1
郡山市	5	7	2	14
須賀川市	9	1	1	11
田村市		9		9
鏡石町		2		2
石川町		1		1
三春町		1		1
白河市	12			12
西郷村	3			3
会津若松市	1	3		4
相馬市	439	26	19	484
南相馬市	525	452	111	1088
広野町	2	39		41
楡葉町	11	100	2	113
富岡町	18	244	6	268
川内村		72		72
大熊町	11	103		114
双葉町	17	99	3	119
浪江町	149	329	33	511
葛尾村		24	1	25
新地町	100	9	10	119
飯館村	1	42		43
いわき市	293	125	37	455
計	1603	1718	225	3546
県内行方不明者（県警発表）			207人	

(「福島民報」2014.6.11より)

原発（被曝）労働者は今

★『河北新聞』2013.10/10 付けで 福島・除染作業「派遣口外するな」という大見出し、小見出しで「逮捕の元暴力団幹部 労働者に指示」という記事に、口外すると「復讐してやる」との脅迫メールを受けていた事実が書かれていた。★除染作業には遠方から来ている人も多く、2次、3次ならず7次、8次の下請けの人は同じ労働をしてもそれだけ多く中抜きをされているため本当に低い賃金しか貰っていないと実際に除染作業をしている人が話していた。また、平地でなく山など、崖や坂の除染は大変な重労働で、除染が林業だとのコメントにびっくりした。そして、除染している場所は6 $\mu\text{Sv/h}$ なので、「吸い込んだ放射性物質を排出するよう木炭の粉を飲んでる」との言葉に、大きなショックを受けた。頭では分っているつもりでも、面と向って語られる言葉はズシリと重たかった。

★『福島民放』2014.5/14 付けでは、「除染中の事故隠蔽容疑」との見出しで、除染作業中の労災事故の隠蔽が報道されていた。

★「西成労働福祉センター」（釜ヶ崎）

2014.3/15 発行の『センターだより』から

- ・昨年度の調査と比べ宿舎に在籍する西成からの労働者が約 300 人減少している。事業所は「東北の震災復旧の仕事に行っているのではないか」「東京オリンピックを見据えて、単価のよい関東に移動しているのではないか」とみている。
- ・センターの調査によると、「除染の仕事をしていない」事業所が大半で、除染の仕事に携わっていると応えた事業所は回答 226 社わずか 13 社(5.8%)。しかも、除染の仕事をしていない事業所の約3割は、除染の仕事の声がかかったが断ったとのこと。理由は「人手不足」が最多で、「条件が不透明だったから」という事業所も目立ったという。
- ・事業所の声として「～除染の仕事に就いて～」現場入場に保険証などが必要で身分がはっきりしていないと雇えない。単価が安い。地元が忙しいのにわざわざ仕事に行く必要はない。宿舎環境も大部屋が当たり前で環境が悪い」との記事が載せられていた。

災害公営住宅の現状

建設地で応募に偏りが出ている。福島、若松（会津）では定数割れも出ている。郡山市、いわき市の災害公営住宅への応募は最高で 4.6 倍にもなっている一方で福島市、会津若松市は定数割れが目立っている。申し込み全体での倍率は 1.4 倍である。

人気に偏りが出ている原因について、避難自治体の関係者によると、意向を調査した時点と現在では避難者を取り巻く環境が変化してきているのではないかとされている。原発事故で避難区域が設定された 10 市町村ごとに 18 回の調査を実施したが、回を重ねるにつれて住民の帰還の意識が薄らぐ傾向にあるとのこと。また、「賠償の見直しによって避難先での自宅が購入できるのであれば、災害公営住宅に入居する必要はない」との住民の意見もある。さらにやっと慣れたところからまた、知らない地で新たに生活をやり直すのはしんどい、「ずっとここ（仮設住宅）にいるよ」との高齢者がいることも事実である。（『福島民報』2014.5.20 に基づく）

帰還促進の行政と住民

期間困難区域への一時帰宅者個人々の放射線量の積算を、行政はチェックし、それを発表している。

	世帯数	人数	個人の積算放射線量
富岡町	12	28	0 ~ 8 $\mu\text{s/h}$
大熊町	34	81	0 ~ 23 $\mu\text{s/h}$
双葉町	32	69	0 ~ 26 $\mu\text{s/h}$
浪江町	22	51	1 ~ 24 $\mu\text{s/h}$

（『福島民報』2014.6.11 より）

☆楢葉町からいわき市の借り上げ住宅に避難している Mさんは町に住めるようになったら戻りたいと言うが、家はネズミに荒らされ放題、生活の準備はしても放射線量が気になる。住宅の除染は終えても自宅の裏山からは 2 $\mu\text{s/h}$ を検出。現状のままでは安心して生活できないと思い、今後どうするべきか思案に据わっていると。（『福島民放』2014.5/15 に基づく）

（野上記）